

パートナーへの暴力加害要因の特定と効果的な介入方法の

探索

尺度作成を通して

研究代表者

東京大学大学院教育学研究科 喜入 暁

まえがき

パートナーに対する暴力は現代社会における公衆衛生上の問題の一つとして言及される (Bair-Merritt et al., 2014)。特に、パートナー間で発生する暴力は、パートナー間の関係満足感の低下や不和を引き起こすだけでなく (Copp et al., 2015)、その後のストーキング行為や殺人にまで発展する可能性が指摘されている (Douglas & Dutton, 2001; Melton, 2007; Nicolaidis et al., 2003)。そのため、パートナー間の問題として民事不介入の原則に従うのではなく、積極的な対処や予防および教育低介入が必要とされる。このような現状に対し、社会的な対応として、パートナー暴力であるドメスティック・バイオレンス (domestic violence: DV) を取り締まる法律 (DV 防止法) の制定や複数の改定、非難シェルターの拡充などがなされてきた。また、実際に DV 防止法が制定されてから現在までに、パートナー暴力事案の認知件数は増加傾向にある (警察庁, 2018)。したがって、パートナー暴力が家庭内のいざこざを超える社会的な問題であり、援助要請をする必要がある事案であることが一般に認知されつつあると言えよう。

一方で、パートナー暴力のメカニズムや予防および教育的介入に関する研究は国内外で注目されているものの、国内におけるパートナー暴力の知見は限られている (喜入, 2018a)。特に、多くの調査研究では研究者や自治体が各々独自の指標を用いており、パートナーへの暴力の加害要因の共通知見が得られていないという現状がある (赤澤, 2015)。したがって、国内におけるパートナーへの暴力に関する研究を発展させる上で、コンセンサスの得られた測定指標の作成する必要があると考えられる。

このような背景から、申請者らはパートナーへの暴力を客観的に測定する尺度を作成した (IPV 尺度; 喜入・越智, 2015, 2016a, b; 越智他, 2015a, b, 2016a, b)。さらに、この尺度を用いることによってパートナーへの暴力加害についての様々な要因が明らかにされてきた (Kiire, 2017; 越智他, 2016a, b)。しかし一方で、この尺度は現段階ではコンセンサスが得られたものとはいえない。すなわち、一部妥当性が示されていると考えられているものの (喜入・越智, 2016a, b)、妥当性検証

に用いられた指標が少ないことや、一般人口を対象とした妥当性検証が十分ではない。

これらを踏まえ、本研究では、一般人口を対象としてパートナー暴力を測定する尺度の妥当性を検証し、国外の知見や予測される知見と整合的な結果が示されるかどうかを検証する。さらに、この尺度を実際にパートナー関係にある2者に実施し、カップル関係変数としてのパートナー暴力促進要因を明らかにする。特に、個人特性に比べてカップル関係変数は教育的介入や予防的介入によって操作可能であると考えられるため、今後の実務的応用のための基礎的知見として明らかにすることが重要であると考えられる。

調査1：Web調査によるIPV尺度の妥当性検証

問題と目的

個人特性との関連によるIPV尺度の妥当性は、主に大学生のみが対象であるため、一般人口を対象として検証する必要がある（喜入・越智, 2016b, Kiire, 2017）。加えてこれまでに、個人特性として世界的に共通した見解が得られているビッグ・ファイブ・パーソナリティ（開放性、勤勉性、外向性、協調性、神経症傾向）や、多くの心理・行動パターンと関連を示すアタッチメントスタイル、共感性、セルフコントロールとの関連は検証されていない。そこで、これらの特性とIPV尺度との関連を示すことでIPV尺度の妥当性を検証する。これまでのパーソナリティに関する妥当性検証の結果は、パートナー暴力がDark Triad、反社会性パーソナリティ、境界性パーソナリティと正の関連を示すことが指摘されている（喜入・越智, 2016b）。これらのパーソナリティはビッグ・ファイブ・パーソナリティのうち、特に協調性と負の関連を示し、神経症傾向と正の関連を示す（Bastiaansen et al., 2011）。また、Dark Triadは特に協調性に加えて勤勉性とも負の関連を示す（喜入, 2016）。したがって、IPV尺度で測定されるパートナー暴力は協調性・勤勉性との負の関連および神経症傾向との正の関連が予測される。また、Dark Triadはセルフコントロール（Jonason & Tost, 2010）および共感性（Jones & Figueredo, 2013）との負の関連が示されるため、パートナー暴力とセルフコントロールおよび共感性との間に負の関連が予測される。一方で、Dark Triad、境界性パーソナリティ、反社会性パーソナリティは、回避アタッチメントや不安アタッチメントと関連する（Brennan & Shaver, 1998; Jonason et al., 2015）。したがって、パートナー暴力と不安・回避アタッチメントとの正の関連が予測される。

また、国外において用いられるCTS2-SF（Straus & Douglas, 2004）との関連を検証する。CTS2-SFは、国外において用いられるパートナー暴力を測定する尺度であるが、この尺度で測定されるパートナー暴力は重篤度が高く、また、パートナー暴力の多様な形態を測定することについてやや不十分である。しかし、CTS2-SFで測定される形態は本研究で用いるIPV尺度が包括すると考えられるため、IPV尺度におけるCTS2-SFの各側面に対応する形態同士の関連性を検証する。CTS2-SFにおける身体的暴力（physical assault）および傷害（injury）は、IPV尺度における身体的暴力に、CTS2-SFにおける心理的攻撃（psychological aggression）は、IPV尺度における間接的暴力および言語的暴力に、CTS2-SFにおける性的強制（sexual coercion）はIPV尺度における性的暴力に対応すると考え

られるため、これらの組み合わせでの正の関連が予測される。

さらに、個人差に通底する特徴との関連を検証する。この特徴は7領域からなり、進化的な観点から、これらの領域が各個人の個人差に通底する可能性が指摘されている (Figueredo et al., 2018a)。7領域は、明察性 (insight, planning, and control: 将来の展望や計画性など)、両親との関係 (Parental Relationship Quality)、親族との関係 (Family Contact and Support)、友人との関係 (Friends Contact and Support)、一般的利他性 (General Altruism)、宗教性 (Religiosity)、パートナーアタッチメント (Romantic Partner Attachment) である。これらの領域はいずれも低いほどパートナー暴力をする可能性が考えられるため (Figueredo et al., 2018b)、各々の組み合わせで負の関連が示されることが予測される。

方法

株式会社クロス・マーケティングに調査を依頼した。

参加者 株式会社クロス・マーケティングが保有する全国の調査参加者候補サンプルから、現在異性と婚姻関係または交際関係にある18歳から69歳までの一般人を対象とした。各年代 (18-29歳, 30代, 40代, 50代, 60代) で男女各200名のサンプルを収集し、計2000サンプルからデータを取得した ($M_{age} = 44.9$, $SD = 13.9$; $M_{18-29y} = 25.6$, $M_{30s} = 35.3$, $M_{40s} = 45.2$, $M_{50s} = 54.1$, $M_{60s} = 64.3$)。交際期間は平均155.5ヶ月 ($SD = 159.2$) であった。

調査内容 デモグラフィック特徴 (年齢, 性別, 交際期間, 婚姻関係の有無, 交際パートナーの有無) および次の尺度への回答を求めた。

(1) IPV 尺度 (Kiire, 2017) パートナー暴力の7形態の被害および加害経験を、各3項目で測定する、42項目の尺度である。参加者は各項目に5件法 (1 = まったくない, 5 = よくある) で回答した。各形態および総合得点の尺度得点は平均得点を用いた。

(2) Ten-Item Personality Inventory 日本語版 (小塩他, 2012) ビッグ・ファイブ・パーソナリティを各2項目で測定する、10項目の尺度である。参加者は各項目に7件法 (1 = 全く違うと思う, 7 = 強くそう思う) で回答した。

(3) 成人愛着スタイル尺度 (中尾・加藤, 2004) 回避アタッチメントスタイル (17項目) および不安アタッチメントスタイル (9項目) を測定する、26項目の尺度である。参加者は各項目に7件法 (1 = 全く当てはまらない, 7 = 非常によく当てはまる) で回答した。

(4) 対人反応性指標日本語版 (日道他, 2017) 共感性の4因子 (共感的関心, 視点取得, 個人的苦痛, 創造性) を各7項目で測定する、28項目の尺度である。参加者は各項目に5件法 (1 = 全く当てはまらない, 5 = 非常によく当てはまる) で回答した。

(5) 短縮版セルフコントロール尺度日本語版 (尾崎他, 2016) セルフコントロールを13項目で測定する尺度である。参加者は各項目に5件法 (1 = 全くあてはまらない, 5 = とてもあてはまる) で回答した。

(6) CTS2-SF (未公開) パートナーとの葛藤に対する対処行動 (パートナー暴力が主) を測定する尺度である。CTS2-SFでは、3つのパートナー暴力形態の被害・加害経験 (身体的暴力, 傷害,

精神的攻撃、性的強制)を、重篤度の高い項目と低い項目の各2項目で測定し、加えて、パートナー間葛藤に対する説得的行動(negotiation)の経験を認知的側面と感情的側面の2項目で測定する。計20項目の尺度であり、参加者は各項目の行動について、1(ここ1年間で1回)~6(ここ1年間で21回以上)または7(ここ1年では0回だが、それ以前にあった)、8(今まで全くなかった)から回答した。各経験の頻度は、各項目の頻度の中点を使用し(たとえば、3「3~5回」の場合、「4回」として集計した)、経験の有無は、8以外であった場合に1、8の場合には0として集計した(Straus & Douglas, 2004)。なお、本報告書ではすべて経験の有無としての2値データを用いた。

(7) K-SF-42 日本語版(未公刊) 個人差に通底する行動パターンの7領域を、各6項目で測定する、42項目の尺度である(Figueroa et al., 2018a)。参加者は、明察性、一般的利他性、宗教性、パートナーへのアタッチメントの各項目に7件法(1=全くあてはまらない、7=非常にあてはまる)で回答し、良心との関係、親族との関係、友人との関係の各項目に4件法(1=まったくない、4=いつも)で回答した。なお、4件法での回答は7件法での回答に合致するように変換した。

また、パートナー暴力を受けた際の他者への相談経験と、その時のパートナーが現在のパートナーか否かについての回答も併せて求めた。

結果

IPV 尺度の分析

記述統計 IPV 尺度の被害・加害経験の平均値と標準偏差を、性別および年代ごとに算出した(Table 1; 5~8列)。また、各パートナー暴力の経験の有無を2値化し、それぞれの年代および性別ごとに、集計した(Table 1; 1~4列)。いずれかの形態のパートナー暴力を経験した割合は、被害・加害とも7~8割程度であった(被害経験は79.0%、加害経験は71.6%)。パートナー暴力の形態ごとの割合について、半数以上の参加者が経験した暴力形態は、被害経験では間接的暴力(53.0%)、支配・監視(57.7%)、言語的暴力(65.0%)、加害経験では、言語的暴力(51.8%)であった。

また、いずれかのパートナー暴力加害を、男性のみが行使するパターン、女性のみが行使するパターン、双方向的に行使するパターンのそれぞれの割合を算出したところ、パートナーのいずれかがパートナー暴力を行使するパターンよりも、双方向的に行使するパターンが多いことが示された(加害・被害の経験がいずれもない割合は21.0%、男性で加害経験がなく被害経験のみある割合は6.9%、女性で加害経験がなく被害経験のみある割合は6.3%、加害・被害のいずれの経験もある割合は65.9%)。この結果は、国外における先行研究を支持する(Straus, 2008)。

なお、CTS2-SFで測定した場合、パートナー暴力の経験率は、被害では3~4割程度であった(被害経験は35.6%、加害経験は36.7%)。この点は、CTS2-SFは本研究で用いたパートナー暴力尺度に比べて重篤度の高い暴力の頻度を問うものであることが原因であると考えられる。すなわち、本研究で用いたパートナー暴力尺度はより幅広く、一見見過ごされる可能性のあるパートナー暴力の形態を測定していると考えられる。ただし、IPV尺度に含まれる項目すべてが「パートナー暴力」と言える行動かどうかについては議論の余地があるだろう。しかし、いずれの行動もパートナーに対

して何らかのコストを与えるものであり、パートナー間の問題行動として言及される項目であるため、本研究ではすべてパートナー暴力として扱った。

Table 1. パートナー暴力の被害・加害経験と分散分析で示された主効果の多重比較の結果

		女性		男性		女性		男性		分散分析の主効果 (多重比較) ^a	
		度数	%	度数	%	M	SD	M	SD	年代差	性差
被害経験 身体的暴力	18-29 歳	40	20.0	67	33.5	1.19	0.49	1.41	0.79	ns	ns
	30 代	32	16.0	73	36.5	1.16	0.50	1.32	0.59		
	40 代	50	25.0	80	40.0	1.19	0.43	1.39	0.69		
	50 代	49	24.5	80	40.0	1.21	0.50	1.37	0.59		
	60 代	51	25.5	74	37.0	1.19	0.38	1.27	0.44		
間接的暴力	18-29 歳	62	31.0	91	45.5	1.36	0.77	1.49	0.75	<40 代, <50 代	男性>女性
	30 代	86	43.0	110	55.0	1.50	0.83	1.57	0.74		
	40 代	105	52.5	132	66.0	1.54	0.74	1.68	0.77	>60 代	
	50 代	117	58.5	135	67.5	1.59	0.81	1.67	0.69	>60 代	
	60 代	98	49.0	124	62.0	1.42	0.60	1.53	0.59		
支配・監視	18-29 歳	103	51.5	114	57.0	1.70	1.04	1.83	0.98	>60 代	男性>女性
	30 代	107	53.5	132	66.0	1.62	0.89	1.67	0.72	>60 代	
	40 代	100	50.0	145	72.5	1.51	0.72	1.81	0.79	>60 代	
	50 代	105	52.5	136	68.0	1.51	0.68	1.71	0.72	>60 代	
	60 代	93	46.5	118	59.0	1.36	0.54	1.51	0.57		
言語的暴力	18-29 歳	109	54.5	116	58.0	1.61	0.78	1.67	0.87		男性>女性
	30 代	120	60.0	130	65.0	1.66	0.80	1.66	0.74		
	40 代	138	69.0	152	76.0	1.72	0.78	1.81	0.77	>60 代	
	50 代	136	68.0	145	72.5	1.70	0.71	1.79	0.70	>60 代	
	60 代	116	58.0	137	68.5	1.51	0.63	1.61	0.59		
性的暴力	18-29 歳	86	43.0	67	33.5	1.39	0.61	1.33	0.62	ns	男性<女性
	30 代	77	38.5	73	36.5	1.39	0.68	1.28	0.47		
	40 代	81	40.5	83	41.5	1.35	0.57	1.32	0.51		
	50 代	92	46.0	76	38.0	1.39	0.58	1.31	0.53		
	60 代	89	44.5	89	44.5	1.31	0.46	1.31	0.46		
経済的暴力	18-29 歳	61	30.5	92	46.0	1.26	0.51	1.51	0.80	<40 代, <50 代, 60 代男性>女性	
	30 代	66	33.0	88	44.0	1.36	0.68	1.51	0.75	<50 代	
	40 代	78	39.0	130	65.0	1.39	0.70	1.67	0.66		
	50 代	100	50.0	129	64.5	1.44	0.58	1.70	0.72		

	60代	89	44.5	128	64.0	1.36	0.53	1.66	0.69			
ストーキング	18-29歳	48	24.0	86	43.0	1.25	0.58	1.45	0.71	ns	男性>女性	
	30代	51	25.5	81	40.5	1.26	0.63	1.37	0.61			
	40代	56	28.0	97	48.5	1.24	0.53	1.46	0.64			
	50代	75	37.5	94	47.0	1.30	0.47	1.39	0.55			
	60代	57	28.5	93	46.5	1.22	0.41	1.40	0.56			
被害総合得点	18-29歳	138	69.0	151	75.5	1.39	0.54	1.53	0.66	ns	男性>女性	
	30代	151	75.5	163	81.5	1.42	0.57	1.48	0.53			
	40代	160	80.0	176	88.0	1.42	0.48	1.59	0.55			
	50代	160	80.0	167	83.5	1.45	0.46	1.56	0.52			
	60代	149	74.5	165	82.5	1.34	0.40	1.47	0.46			
加害経験	身体的暴力	18-29歳	45	22.5	43	21.5	1.26	0.62	1.19	0.48	ns	ns
		30代	49	24.5	41	20.5	1.21	0.46	1.18	0.44		
		40代	44	22.0	54	27.0	1.19	0.46	1.26	0.56		
		50代	42	21.0	55	27.5	1.20	0.50	1.24	0.47		
		60代	28	14.0	49	24.5	1.10	0.31	1.21	0.44		
間接的暴力	18-29歳	68	34.0	64	32.0	1.30	0.55	1.33	0.61	<40代, <50代	男性>女性	
	30代	80	40.0	87	43.5	1.41	0.64	1.45	0.68			
	40代	88	44.0	118	59.0	1.41	0.64	1.57	0.66	>60代		
	50代	106	53.0	120	60.0	1.49	0.66	1.54	0.60	>60代		
	60代	83	41.5	111	55.5	1.32	0.47	1.48	0.57			
支配・監視	18-29歳	90	45.0	94	47.0	1.51	0.79	1.49	0.71	>50代, >60代	ns	
	30代	79	39.5	87	43.5	1.41	0.67	1.39	0.59	>60代		
	40代	86	43.0	114	57.0	1.41	0.68	1.47	0.58	>60代		
	50代	78	39.0	101	50.5	1.31	0.53	1.40	0.52			
	60代	48	24.0	78	39.0	1.19	0.42	1.30	0.46			
言語的暴力	18-29歳	94	47.0	90	45.0	1.45	0.68	1.45	0.69		ns	
	30代	106	53.0	98	49.0	1.43	0.56	1.47	0.65			
	40代	107	53.5	125	62.5	1.51	0.71	1.54	0.59	>60代		
	50代	102	51.0	119	59.5	1.44	0.60	1.50	0.55			
	60代	86	43.0	109	54.5	1.33	0.51	1.45	0.53			
性的暴力	18-29歳	20	10.0	70	35.0	1.08	0.30	1.34	0.60	ns	男性>女性	
	30代	19	9.5	72	36.0	1.06	0.22	1.31	0.55			
	40代	12	6.0	84	42.0	1.04	0.18	1.33	0.53			
	50代	18	9.0	84	42.0	1.07	0.26	1.32	0.48			

	60代	14	7.0	79	39.5	1.05	0.19	1.32	0.51		
経済的暴力	18-29歳	67	33.5	60	30.0	1.31	0.56	1.26	0.52	ns	男性<女性
	30代	50	25.0	59	29.5	1.25	0.51	1.24	0.47		
	40代	60	30.0	84	42.0	1.31	0.62	1.34	0.53		
	50代	85	42.5	86	43.0	1.44	0.65	1.32	0.48		
	60代	82	41.0	77	38.5	1.38	0.54	1.27	0.43		
ストーキング	18-29歳	48	24.0	53	26.5	1.22	0.47	1.23	0.50	ns	男性>女性
	30代	40	20.0	56	28.0	1.16	0.39	1.23	0.51		
	40代	31	15.5	61	30.5	1.14	0.41	1.22	0.42		
	50代	46	23.0	61	30.5	1.15	0.38	1.24	0.45		
	60代	31	15.5	63	31.5	1.12	0.31	1.25	0.43		
加害総合得点	18-29歳	130	65.0	131	65.5	1.30	0.44	1.33	0.45		男性>女性
	30代	138	69.0	144	72.0	1.27	0.37	1.33	0.44		
	40代	140	70.0	163	81.5	1.29	0.38	1.39	0.44	>60代	
	50代	149	74.5	159	79.5	1.30	0.38	1.36	0.40		
	60代	128	64.0	149	74.5	1.21	0.28	1.32	0.38		

注) 度数は一度でも経験したことがある参加者の人数である。

^aいずれも 5%水準で有意な組み合わせを示す。有意な組み合わせがない場合に"ns"と記した。

確証的因子分析 IPV 尺度は、多様な暴力形態、具体的には身体的暴力、間接的暴力、支配・監視、言語的暴力、性的暴力、経済的暴力、ストーキングの7形態の測定を想定している。そこで、この7形態が適切に測定されているかどうかを、確証的因子分析によって検証した(モデル1)。加害経験について、確証的因子分析を行ったところ、適合度は良好であった($\chi^2(168) = 879.69$, CFI = .901, RMSEA = .046, SRMR = .048)。また、それぞれの因子間相関は高く、単一の高次因子を想定できる可能性が考えられたため、高次因子分析モデルを検証した(モデル2: $\chi^2(182) = 1167.64$, CFI = .863, RMSEA = .052, SRMR = .057)。また、階層的因子分析モデルを検証した(モデル3: $\chi^2(168) = 1082.81$, CFI = .873, RMSEA = .052, SRMR = .053)。各モデルの適合度を比較したところ、モデル1 (AIC = 63632.65, BIC = 64103.13)、モデル3 (AIC = 64080.42, BIC = 64550.89)、モデル2 (AIC = 64322.47, BIC = 64714.53)の順で適合度が高かった。したがって、モデル1である、7因子での確証的因子分析モデルが最もデータに適合し、次いで階層的因子分析モデル、高次因子分析モデルの順でデータに適合した。

同様に、被害経験についても因子分析を行った。分析の結果、加害経験と同様に、確証的因子分析モデル($\chi^2(168) = 1065.38$, CFI = .905, RMSEA = .052, SRMR = .042, AIC = 81002.84, BIC = 81473.32)、階層的因子分析モデル($\chi^2(168) = 1170.81$, CFI = .894, RMSEA = .055, SRMR = .046, AIC = 81251.73, BIC = 81722.20)、高次因子分析モデル($\chi^2(182) = 1275.81$, CFI = .884, RMSEA = .055, SRMR = .049,

AIC = 81483.05, BIC = 81875.11) の順でデータに適合した。

これらの結果から、各下位側面は共通点があるものの弁別され得る質的な差異が示される可能性も考えられるため、この点についての検証が必要であろう。しかし一方で、階層的因子分析モデル、高次因子分析モデルにおいても十分な適合度を示していると考えられる。したがって、パートナー暴力とその他の変数とのより高次の関連を検証する際に、単一の「パートナー暴力の総合得点」として扱うこともできると考えられる。

デモグラフィックデータとの関連

年齢、性別、交際期間が各パートナー暴力加害・被害に及ぼす効果を多変量重回帰分析によって検証した (Table 2)。分析の結果、加害経験では、若年であるほど支配・監視が多かった。また、男性は女性に比べて間接的暴力、性的暴力、ストーキングが高く、経済的暴力が少なかった。さらに、交際期間が長いほど間接的暴力が高かった。一方で被害経験では、若年であるほど支配・監視が高いことに加え、高齢であるほど経済的暴力が多かった。また、性的暴力は男性よりも女性の被害が多かったものの、残る暴力形態の被害は男性が多かった。なお、交際期間との関連は示されなかった。

年齢による効果の特徴として、特に、支配・監視との関連が挙げられる。すなわち、若年であるほど SNS をはじめとするインターネット環境が身近であると考えられ、そのため支配・監視との負の関連が示された可能性が考えられる。

一方で、パートナー暴力と年齢の関連は線形ではない可能性も考えられる。そこで、年齢をカテゴリ化し (18-29 歳, 30 代, 40 代, 50 代, 60 代)、年齢カテゴリと性別を独立変数、各パートナー暴力形態を従属変数とし、交際期間を共変数とした共分散分析を行った。分析の結果、いずれの暴力形態との組み合わせにおいても年齢カテゴリと性別との交互作用効果は示されなかったため、年齢カテゴリ差の結果および性差の結果のみ示した (Table 1; 右 2 列)。全体的に、60 代での加害・被害が少なく、40-50 代での加害・被害が相対的に多いことが示された。ただし、これらの結果は実際の暴力よりも、各個人の認識を反映している可能性も考えられるため、単純に 60 代で暴力が少なく 40-50 代で暴力が多いということを指すわけではない。加害・被害経験のパートナー間での一致については、調査 2 の結果で詳述する。

Table 2. 各暴力形態を目的変数とした多変量重回帰分析の結果 (標準偏回帰係数)

	身体的暴力	間接的暴力	支配・監視	言語的暴力	性的暴力	経済的暴力	ストーキング	総合得点
被害経験								
年齢	-.04	.02	-.13**	-.02	-.02	.10**	.00	.02
性別 (女性 = 1, 男性 = 0)	-.15**	-.07**	-.11**	-.05*	.05*	-.18**	-.14**	-.12**

交際期間	.02	.03	.00	.01	-.01	-.03	-.03	-.01

加害経験								
年齢	-.05	.01	-.15**	-.05	-.03	.03	-.04	.07**
性別（女性 = 1, 男性 = 0）	-.03	-.07**	-.04	-.04	-.30**	.05*	-.09**	-.03
交際期間	.03	.07**	.04	.04	.03	.04	.03	-.08**

* $p < .05$, ** $p < .01$

併存尺度との関連

CTS2-SF との関連 CTS2-SF には、IPV 尺度に包含される項目が含まれている。そこで、CTS2-SF の項目に対応する、IPV 尺度によって測定された形態の経験の有無との関連を検証した。具体的には、CTS2-SF の身体的暴力を反映する項目（加害経験は 9, 11, 被害経験は 10, 12）、傷害を反映する項目（加害経験は 6, 16, 被害経験は 5, 15）は IPV 尺度の身体的暴力と対応し、CTS2-SF の精神体攻撃を反映する項目（加害経験は 3, 13, 被害経験は 4, 14）は IPV 尺度の間接的暴力および言語的暴力（項目 3, 4 のみ）と対応し、性的強制を反映する項目（加害経験は 19, 17, 被害経験は 20, 18）は IPV 尺度の性的暴力と対応すると考えられる（ただし、CTS2-SF の項目 17, 18 は重篤度が高く身体的暴力ともかかわるため本分析では使用しない）。したがって、これらの項目の経験の有無の一致率（ κ 係数）を加害・被害経験ごとに算出した（Table 3）。全体的な結果として、一致率は低かった。この点について、CTS2-SF の項目は IPV 尺度の項目に比べてより重篤度が高いため、各経験の有無が一致しなかった可能性が考えられる。また、IPV 尺度において、身体的暴力や間接的暴力のように物理的な攻撃を予期させる項目が含まれている暴力形態は、やや一致率が高かった。この点も、先のセクションで言及したように、IPV 尺度が CTS2-SF よりも広い領域の暴力形態を測定していることが影響している可能性が考えられる。

Table 3. IPV 尺度の各形態と対応する CTS2-SF の項目との一致率

IPV 尺度の 形態	加害経験			被害経験		
	CTS2-SF の項目	κ		CTS2-SF の項目	κ	
身体的暴力	9	.42	**	10	.27	**
	11	.10	**	12	.04	
	6	.21	**	5	.19	**
	16	N/A		15	N/A	
間接的暴力	3	.45	**	4	.35	**
	13	N/A		14	N/A	
言語的暴力	3	.35	**	4	.19	**

* $p < .05$, ** $p < .01$

注) 「N/A」は理論上想定されない値が算出された。

個人特性との関連：相関分析 IPV 尺度の各項目の得点を下位尺度ごとに平均化し、各パートナー暴力形態の尺度得点とした。また、すべての項目の平均得点をパートナー暴力の総合得点とした。同様に、同時に測定した個人特性（ビッグ・ファイブ・パーソナリティ、アタッチメント、共感性、セルフコントロール）も下位尺度ごとに平均得点を算出し、尺度得点とした。

次に、パートナー暴力加害・被害の7形態と個人特性の各因子との相関係数を算出した（Table 4; 喜入, 2018c）¹。加害経験では、ビッグ・ファイブ・パーソナリティでは、協調性がいずれのパートナー暴力形態とも負の関連を、神経症傾向は性的暴力を除くすべてのパートナー暴力形態と正の関連を、勤勉性は身体的・間接的暴力を除くすべてのパートナー暴力形態と負の関連を示し、仮説を概ね支持した。

アタッチメントとの関連では、不安アタッチメントがすべてのパートナー暴力形態と正の関連を示し、仮説を支持した。また、回避アタッチメントは身体的暴力、間接的暴力、言語的暴力、経済的暴力との正の関連を示す一方で、支配・監視との負の関連を示した。これらは、他者を拒絶することを特徴とする回避アタッチメントの特徴と一致すると考えられる。

共感性との関連では、個人的苦痛が性的暴力を除くすべてのパートナー暴力形態と正の関連を示し、創造性が身体的暴力・性的暴力を除くすべてのパートナー暴力形態と正の関連を示した。また、共感的関心は身体的暴力、言語的暴力、性的暴力、総合得点と負の関連を、視点取得は身体的暴力、言語的暴力と負の関連を示した。

セルフコントロールは、すべてのパートナー暴力形態と負の関連を示し、仮説を支持した。

一方、被害経験でも同様に、すべてのパートナー暴力形態と協調性との負の関連が示され、神経症傾向との正の関連が示された。また、回避アタッチメントと不安アタッチメントはいずれもすべてのパートナー暴力形態と正の関連を示した。また、共感性は加害経験と同様に、個人的苦痛がすべてのパートナー暴力形態と正の関連を示し、創造性が支配・監視、言語的暴力、性的暴力、総合得点との正の関連を示した。さらに、セルフコントロールはいずれのパートナー暴力形態とも負の関連を示した。

Table 4. 各暴力形態と個人特性との相関係数

	外向性	協調性	勤勉性	神経症傾向	開放性	回避	不安	創造性	共感的関心	個人的苦痛	視点取得	セルフコントロール
--	-----	-----	-----	-------	-----	----	----	-----	-------	-------	------	-----------

被害経験

¹ 日本社会心理学会第 59 回大会で発表された。

身体的暴力	.01	-.11**	-.05*	.07**	.02	.13**	.16**	.02	-.05*	.07**	-.02	-.11**
間接的暴力	.00	-.11**	-.08**	.11**	.01	.18**	.18**	.02	-.01	.14**	-.02	-.14**
支配・監視	.01	-.08**	-.08**	.12**	.04	.10**	.15**	.10**	.01	.11**	.02	-.15**
言語的暴力	-.03	-.10**	-.16**	.18**	-.03	.16**	.23**	.11**	.04	.19**	.02	-.22**
性的暴力	-.02	-.10**	-.08**	.12**	-.04	.21**	.17**	.06**	-.03	.15**	-.02	-.15**
経済的暴力	-.05*	-.05*	-.03	.05*	.00	.19**	.18**	.01	-.03	.05*	-.05*	-.12**
ストーキング	-.01	-.07**	-.03	.06**	.02	.22**	.14**	.02	-.03	.08**	.00	-.12**
総合得点	-.02	-.11**	-.09**	.13**	.00	.21**	.22**	.06**	-.01	.15**	-.01	-.19**

加害経験

身体的暴力	.03	-.16**	-.03	.14**	.01	.06**	.13**	.04	-.06**	.09**	-.06**	-.14**
間接的暴力	.02	-.17**	-.01	.18**	.05*	.08**	.15**	.06*	-.01	.14**	-.04	-.15**
支配・監視	.06*	-.13**	-.10**	.18**	.05*	-.11**	.23**	.14**	.01	.14**	.01	-.15**
言語的暴力	.01	-.15**	-.10**	.16**	.03	.08**	.12**	.08**	-.06**	.14**	-.06**	-.20**
性的暴力	.03	-.07**	-.06**	.02	.03	.03	.12**	.00	-.11**	-.03	-.03	-.12**
経済的暴力	.03	-.07**	-.09**	.10**	.04*	.05*	.11**	.11**	-.03	.13**	-.02	-.16**
ストーキング	.05*	-.08**	-.06*	.11**	.04	-.01	.17**	.06*	-.04	.08**	.01	-.12**
総合得点	.04	-.16**	-.09**	.18**	.05*	.04	.20**	.10**	-.05*	.14**	-.04	-.21**

* $p < .05$, ** $p < .01$

続いて、個人差に通底する7領域の特徴とパートナー暴力形態の加害・被害経験との関連を相関分析によって検証した (Table 5)。分析の結果、パートナーアタッチメントおよび両親との関係はすべての加害・被害の両経験ですべてのパートナー暴力形態と負の関連を示し、仮説を支持した。また、一般的利他性、親族との関係、友人との関係の各領域も、複数のパートナー暴力と負の関連を示した。一方、宗教性は仮説とは逆に、パートナー暴力と正の関連を示した。この点について、宗教性に対する国内外の文化差が存在する可能性があり、それが本調査の結果に寄与した可能性が考えられる。この点については、今後の詳細な検討が必要だろう。

Table 5. 各暴力形態と個人差に通底する特徴との相関係数

	明察性	両親との 関係	親族との 関係	友人との 関係	一般的利 他性	宗教性	パートナーア タッチメント
被害経験							
身体的暴力	-.10**	-.10**	-.05*	-.01	.00	.06**	-.16**
間接的暴力	-.08**	-.11**	-.06**	-.01	.00	.05*	-.24**
支配・監視	-.04	-.05*	-.01	.02	-.03	.04	-.17**
言語的暴力	-.06*	-.10**	-.08**	-.05*	-.03	.06**	-.28**

性的暴力	-.11**	-.11**	-.05*	.00	.01	.08**	-.23**
経済的暴力	-.08**	-.12**	-.12**	-.09**	.00	.08**	-.25**
ストーキング	-.07**	-.10**	-.05*	-.02	.04	.08**	-.23**
総合得点	-.09**	-.12**	-.08**	-.03	-.01	.08**	-.28**
加害経験							
身体的暴力	-.09**	-.12**	-.07**	-.03	-.04	.05*	-.09**
間接的暴力	-.08**	-.12**	-.08**	-.08**	-.07**	.03	-.14**
支配・監視	-.01	-.07**	.00	-.01	-.04*	.06*	-.07**
言語的暴力	-.10**	-.14**	-.07**	-.05*	-.11**	.02	-.14**
性的暴力	-.03	-.07**	-.05*	-.06**	-.02	.06**	-.09**
経済的暴力	-.08**	-.08**	-.04	-.01	-.03	.10**	-.12**
ストーキング	-.04	-.06**	.00	-.01	.01	.10**	-.11**
総合得点	-.09**	-.13**	-.06**	-.05*	-.06**	.08**	-.15**

* $p < .05$, ** $p < .01$

個人特性との関連：回帰分析 個人特性のうち、各パートナー暴力加害形態に特有の効果を示す変数を明らかにするために、各パートナー暴力加害を目的変数、個人特性の各因子を説明変数とした多変量重回帰分析を行った（Table 6）。分析の結果、セルフコントロールが支配・監視を除くすべてのパートナー暴力加害形態と特有の負の関連を示した。また、ビッグ・ファイブ・パーソナリティのうち、神経症傾向に加え、外向性が身体的暴力、間接的暴力、支配・監視、言語的暴力と特有の正の関連を示した。一方で、協調性と特有の負の関連を示したのは、身体的暴力、間接的暴力、言語的暴力のみであった。また、勤勉性は身体的暴力、間接的暴力と特有の正の関連を示した。

Table 6. 個人特性で各加害暴力形態を予測した多変量重回帰分析の結果（標準偏回帰係数）

	身体的 暴力	間接的 暴力	支配・ 監視	言語的 暴力	性的暴 力	経済的 暴力	ストー キング
回避アタッチメント	.02	.05*	-.16**	.06*	-.01	.04	-.05*
不安アタッチメント	.07*	.05	.22**	.01	.13**	.04	.16**
創造性	.00	-.03	.06*	.02	.01	.06*	.00
共感的関心	-.04	.01	-.03	-.06	-.10*	-.08**	-.07**
個人的苦痛	.00	.05	.00	.06*	-.10**	.09**	.00
視点取得	.01	.02	.03	.02	.03	.02	.06*
外向性	.07**	.06*	.08**	.06*	.05	.07**	.08**
協調性	-.10**	-.12**	-.05	-.06*	.01	.02	-.01
勤勉性	.11**	.16**	.00	.06	.02	.00	.03

神経症傾向	.09 **	.13 **	.09 **	.08 *	.00	.00	.06
開放性	.02	.06 *	.05	.06 *	.03	.06 *	.05
セルフコントロール	-.12 **	-.14 **	-.05	-.16 **	-.15 **	-.12 **	-.09 **

* $p < .05$, ** $p < .01$

続いて、個人差に通底する特徴とパートナー暴力の関連性を検証した (Table 7)。7 領域の特徴のうち、特に両親との関係とパートナーアタッチメントがすべてのパートナー暴力形態と負の関連を示した。また、明察性は身体的暴力および経済的暴力と、一般的利他性は間接的暴力、支配・監視、言語的暴力との負の関連を示した。一方で、親族との関係はストーキングとの正の関連を示し、宗教性は間接的暴力を除くすべてのパートナー暴力形態と正の関連を示した。この点においても、宗教性の特異性が示されたため、今後の検証が必要であろう。

Table 7. 個人差に通底する特徴で各暴力加害形態を予測した多変量重回帰分析の結果 (標準偏回帰係数)

	身体的 暴力	間接的 暴力	支配・ 監視	言語的 暴力	性的暴 力	経済的 暴力	ストーキ ング
明察性	-.08 **	-.03	.01	-.05	-.01	-.07 **	-.04
両親との関係	-.11 **	-.09 **	-.09 **	-.13 **	-.05 *	-.07 **	-.08 **
親族との関係	-.01	.03	.06	.05	.03	.01	.07 *
友人との関係	.04	-.02	.01	.03	-.05	.04	-.01
一般的利他性	-.02	-.06 *	-.09 **	-.12 **	-.03	-.05	-.01
宗教性	.07 **	.05	.08 **	.06 *	.07 **	.12 **	.10 **
パートナーアタ ッチメント	-.05 *	-.12 **	-.06 *	-.12 **	-.07 **	-.08 **	-.08 **

* $p < .05$, ** $p < .01$

他者への相談を促進する個人特性

IPV 尺度でのパートナー暴力被害の得点が 2 を超える参加者を対象に、他者への相談を促進する個人特性の効果をロジスティック回帰分析により検証した (Table 8)。まず、一般的に男性は女性に比べて低く、年齢が高いほど相談をする可能性が低いことが示され、交際期間は有意な関連を示さなかった。また、男性において、外向性が高いほど相談せず ($b_{\text{simple}} = -0.98^{**}$)、開放性 ($b_{\text{simple}} = 1.40^{**}$)、不安アタッチメント ($b_{\text{simple}} = 1.33^{*}$) が高いほど相談する可能性が高いことが示された。一方で、女性は男性に比べて相談する可能性が高いものの、相談を促進する有意な特性は示されなかった。そのため、女性においては特に状況的な要因などの特性とは異なる変数が他者への相談を促すことに寄与する可能性が考えられる。

Table 8. 相談の有無（あり = 1, なし = 0）を目的変数としたロジスティック回帰分析の結果

	Step1 b	Step2 b	Step3 b
切片	-1.88 **	-1.88 **	-1.88 **
年齢	-0.03	-0.04 *	-0.05 *
性別（女性 = 1, 男性 = 0）	1.87 **	1.79 **	3.80 **
交際期間	0.00	0.00	0.00
外向性		-0.01	-0.43
協調性		-0.06	0.04
勤勉性		0.04	0.30
神経症傾向		0.04	0.28
開放性		0.51 *	0.89 **
回避アタッチメント		0.24	0.10
不安アタッチメント		0.07	0.60
創造性		-0.39	-0.41
共感的関心		0.58	1.35 *
個人的苦痛		0.33	0.82
視点取得		0.58	0.59
セルフコントロール		0.49	1.22 *
性別との交互作用効果			
外向性			1.10 *
協調性			-0.07
勤勉性			-0.86
神経症傾向			-0.36
開放性			-1.02 *
回避アタッチメント			0.47
不安アタッチメント			-1.45 *
創造性			0.31
共感的関心			-1.96
個人的苦痛			-1.87
視点取得			-0.99
セルフコントロール			-1.20

* $p < .05$, ** $p < .01$

婚姻形態とパートナー暴力との関連

パートナー暴力は婚姻関係の有無にかかわらず、同様の形態を示す可能性が指摘されている (Dillon et al., 2013; Ohnishi et al., 2011)。一方で、婚姻関係にあるパートナー関係は、婚姻関係のないパートナー関係に比べて一般的には長期的に継続する関係である。そのため、婚姻関係にあるパートナー間では、そうではないパートナー関係に比べてパートナー暴力によって関係を終了させることが困難であると考えられるため、パートナー暴力がより日常化する可能性や、程度がエスカレートする可能性が考えられる。そこで、実際にパートナー暴力の程度が婚姻関係か否かによって異なるかどうかを検証した。

はじめに潜在ランク分析を行い、パートナー暴力のレベルを3ランクのカテゴリに変換したのち、ランクを目的変数、婚姻関係の有無および性別を説明変数としたロジスティック回帰分析を行った。なお、交際期間を統制変数とした。分析の結果を Table 9 に示した。分析の結果、男性において、ランク1と比較してランク2に既婚者が多く、ランク3では性別にかかわらず既婚者が多いことが示された (喜入, 印刷中)²。

Table 9. ランク1を基準としてランク2, 3の確率を検証したロジスティック回帰分析の結果

		b	SE	
Rank 2	切片	-0.70	0.07	**
	婚姻形態 (未婚 = 1, 既婚 = 0)	-0.22	0.15	
	性別 (女性 = 1, 男性 = 0)	-0.07	0.14	
	交際期間	0.00	0.00	*
	婚姻形態×性別	0.55	0.28	*

単純傾斜				
女性	切片	-0.73	0.10	**
	傾き	0.05	0.20	
男性	切片	-0.66	0.10	**
	傾き	-0.50	0.20	*
Rank3	切片	-1.10	0.09	**
	婚姻形態 (未婚 = 1, 既婚 = 0)	-0.73	0.18	**
	性別 (女性 = 1, 男性 = 0)	-0.55	0.18	**
	交際期間	0.00	0.00	*
	婚姻形態×性別	0.58	0.35	

* $p < .05$, ** $p < .01$

² 日本犯罪心理学会第56大会にて発表予定である。

調査 1 の考察

本調査では、IPV 尺度の妥当性を検証した。因子分析では、想定された 7 因子が示された。さらに、個人特性について、ビッグ・ファイブ・パーソナリティ、アタッチメント、セルフコントロールとの想定され得る関連が検証された。しかし、共感性に関しては想定される関連が検証されなかった。この点について、調整変数としての効果や、第三の変数が影響する可能性を検証する必要があると考えられる。また、国際的なパートナー暴力尺度である CTS2-SF との関連性も不十分であった。この点について、CTS2-SF は比較的重篤度の高い行動を測定しているためであると考えられる。今後は、IPV 尺度で測定されたパートナー暴力と CTS2-SF で測定されるような重篤度の高いパートナー暴力との連続性を検証する必要があるだろう。

また、個人差に通底する特徴とパートナー暴力との関連を検証し、想定され得る関連、特に、パートナーアタッチメントとの関連が示された。ただし、個人差に通底する特徴の 7 領域はいずれもパートナー暴力と関連する可能性が考えられたものの、関連が示されなかった、または仮説とは逆の関連、特に宗教性との負の関連なども示された。したがって、この点についても今後の詳細な検討が必要であると考えられる。

本調査では同時にパートナー暴力を受けた際の相談機関への相談経験および婚姻形態による暴力の重篤化についても検証した。今後は実際の予防や教育的介入において、効果を検証する必要があるだろう。

なお、多くの指標との有意な関連が示されたものの、いずれの係数も低い。実務応用を想定するのであれば、この点についても重篤なパートナー暴力との連続性と併せて検証する必要があるだろう。

調査 2 : カップル関係要因がパートナー暴力に及ぼす影響

目的

パートナー暴力は、調査 1 やこれまでの研究で示されたような個人特性の影響に加え、その個人が置かれる環境や、その個人の状態がトリガーになって発生すると考えられる。また、カップル間で発生する暴力形態であるため、同一個人であっても、交際するパートナーや、カップル間の要因によっても規定される。カップル間の要因は、個人特性に比べて教育的介入や予防によって操作しやすいと考えられるため、カップル間の要因の効果を明らかにすることで、今後の実務に応用できる可能性が考えられる。そこで、カップルを対象に調査を実施し、カップル間の要因、特にパワーバランスに着目し、パートナー暴力に及ぼす効果を検証する。

カップル間の要因を対象とする場合、カップル関係にある 2 者からそれぞれデータを取得する必要がある。しかし、Web 調査や大学での講義における一斉調査では、確実に当該する 2 者からデータが取得できるかどうか疑問が残る。そこで、ストリート・キャッチングによるデータ収集を実施した。

方法

株式会社コーノ・リサーチに調査を依頼した。調査はストリート・キャッチングにより、カップル関係にある2者（ただし、既婚・未婚は問わない）からそれぞれデータを得た。

参加者 18歳以上の100組のカップルが参加した ($M_{age}=40.0, SD=32.0$)。交際期間は平均143.8ヶ月 ($SD=142.5$) であった。

調査内容 デモグラフィック特徴（年齢、性別、交際期間、婚姻関係の有無、交際パートナーの有無）および次の尺度への回答を求めた。

(1) IPV 尺度 調査1参照。

(2) CTS2-SF 調査1参照。

(3) K-SF-42 調査1参照。

(4) 関係流動性 (Yuki et al., 2007) 身近な社会における新規出会いの機会 (5項目) と関係形成・解消の自由度 (7項目) を測定する、12項目の尺度である。参加者は各項目に6件法 (1 = 全くそう思わない, 6 = とてもそう思う) で回答した。ただし、関係流動性とパートナー暴力との明確な関連は示されなかったため、本報告書では割愛する。

(5) パートナー間のパワーバランス カップル間の意思決定においてどちらがより影響力を持つのかを、4項目で測定した。参加者は各項目に、3つの選択肢 (1 = 私よりパートナー, 2 = おなじくらい, 3 = パートナーより私) で回答した。

さらに、参加者はデモグラフィックデータ (年齢、性別、婚姻形態)、交際期間、婚姻形態、どちらが交際宣言をしたかも回答した。

結果

加害と被害の認識の差異

本調査ではカップル関係にある2者からデータを取得したため、お互いの加害・被害経験の認識についての検証が可能である。そこで、加害者の加害経験と被害者の被害経験の認識がカップル間で一致しているかどうかを、項目レベルで検証した。具体的には、IPV 尺度およびCTS2-SF でのカップルでの加害・被害経験の一致の程度を算出した。IPV 尺度での分析では、すべての加害・被害項目に「まったくない」と回答した参加者を除外し、CTS2-SF の分析では、すべての加害・被害項目に「一度もなかった」と回答した参加者を除外した。なお、CTS2-SF の得点はいずれの項目も経験したか否かの2値変数に変換した。

IPV 尺度での認識について、カップル間の加害・被害経験の順位相関係数を算出した。結果を Table 10 に示した。分析の結果、IPV 尺度では、身体的暴力、間接的暴力、言語的暴力は男女いずれも概ね被害・加害経験が相関しているため、これらの暴力の認識はカップル間で一致していると考えられる。また、男性の性的暴力、経済的暴力の加害経験と女性の被害経験にも認識の一致が見られた。一方で、支配・監視、ストーキング、女性の性的暴力および経済的暴力の加害には、認識の一致が示されなかった。

Table 10. IPV 尺度でのパートナー暴力加害と被害の一致の程度（スピアマンの順位相関係数）

		女性加害		男性被害		ρ
		M	SD	M	SD	
身体的暴力	相手の身体を平手で打ったことがある。	1.28	0.65	1.37	0.89	.44**
	相手の身体を足で蹴ったことがある。	1.16	0.58	1.24	0.60	.35**
	相手の顔面を平手で打ったことがある。	1.14	0.48	1.16	0.58	.65**
間接的暴力	大声で怒鳴りつけたり，叫んだり，ののしったことがある。	1.46	0.86	1.62	1.01	.70**
	机や壁を殴る，蹴るなどして相手を脅かしたことがある。	1.13	0.48	1.16	0.52	.25*
	意に沿わないことがあって相手をにらんだことがある。	1.55	0.93	1.51	0.86	.39**
支配・監視	一日に何回もメールや電話をしたことがある。	1.82	1.23	2.20	1.39	.17
	異性の友人との付き合い（会うことや話すこと）を制限したことがある。	1.42	0.96	1.41	0.87	.36**
	相手に行き先を告げさせたり報告させたりしたことがある。	1.62	1.05	1.64	1.00	.21*
言語的暴力	相手を見下すような言い方をしたことがある。	1.61	0.97	1.64	0.92	.25*
	「痩せろ」など体型のことに口を出したことがある。	1.70	1.10	1.91	1.25	.56**
	自分の趣味に合わない髪型や服装だと，馬鹿にしたり文句を言ったりしたことがある。	1.30	0.57	1.72	1.11	.22*
性的暴力	いやがっているのに性的な接触をしたことがある。	1.12	0.39	1.17	0.53	.08
	いやがっているのに性的な話題をしたことがある。	1.03	0.18	1.17	0.53	-.07
	相手の裸や見られたくない写真を撮ろうとしたことがある。	1.03	0.18	1.07	0.25	.20
経済的暴力	借りたお金やものを返さなかったことがある。	1.11	0.31	1.33	0.81	.12
	お金やものを貢がせたことがある。	1.18	0.57	1.21	0.58	.18
	デートの時など相手にお金を払わせたことがある。	1.54	0.95	1.74	1.18	.04
ストーキング	相手が別れようとしたときに困ることを言って脅したことがある。	1.09	0.38	1.15	0.57	.06

	無理を言って相手に会いに行ったことがある。	1.20	0.54	1.14	0.44	.16
	相手がそろそろ帰りたいたいと思っても帰さなかったことがある。	1.16	0.50	1.27	0.59	.32**
		女性被害		男性加害		
		M	SD	M	SD	ρ
身体的暴力	相手に体を平手で打たれたことがある。	1.14	0.46	1.16	0.45	.60**
	相手に身体を足で蹴られたことがある。	1.07	0.25	1.13	0.34	.16
	相手に顔面を平手で打たれたことがある。	1.05	0.23	1.13	0.37	.22*
間接的暴力	大声で怒鳴りつけられたり，叫ばれたり，ののしられたことがある。	1.45	0.77	1.51	0.87	.44**
	机や壁を殴る，蹴るなどして相手から脅かされたことがある。	1.16	0.45	1.25	0.62	.45**
	意に沿わないからと言ってにらまれたことがある。	1.28	0.70	1.39	0.61	.29**
支配・監視	一日に何回もメールや電話をされたことがある。	1.77	1.13	1.88	1.21	.13
	相手に異性の友人との付き合い（会うことや話すこと）を制限されたことがある。	1.20	0.54	1.23	0.57	.40**
	行き先を告げさせられたり報告させられたりしたことがある。	1.40	0.85	1.43	0.65	.11
言語的暴力	相手に見下されるような言い方をされたことがある。	1.80	1.04	1.61	0.91	.33**
	「痩せろ」など，体型のことに口を出されたことがある。	1.60	1.13	1.56	0.97	.55**
	相手の趣味に合わない髪型や服装だと，文句を言われたりしたことがある。	1.31	0.66	1.30	0.57	.23*
性的暴力	いやがっているのに性的な接触をしてることがある。	1.27	0.61	1.37	0.75	.31**
	いやがっているのに性的な話題をすることがある。	1.17	0.60	1.38	0.76	.51**
	裸や見られたくない写真を撮ろうとすることがある。	1.14	0.43	1.16	0.40	.44**
経済的暴力	貸したお金やものを返されなかったことがある。	1.27	0.59	1.25	0.54	.41**
	お金やものを貢がされたことがある。	1.16	0.52	1.20	0.62	.28**
	デートの時などにお金を払わされることが多い。	1.51	1.03	1.59	1.00	.18

ストーキング 別れようとする と困ることを 言って脅され たことがある。 ある。	1.04	0.33	1.13	0.42	.19
会いたくないのに無理を言 って会いに来る。	1.05	0.23	1.25	0.48	.10
そろそろ帰りたい時でも帰 してくれないこ とがある。	1.22	0.55	1.16	0.40	.13

* $p < .05$, ** $p < .01$

CTS2-SF では、 κ 係数を算出した。分析結果を Table 11 に示した。CTS2-SF でも IPV 尺度の場合と同様に、物理的な攻撃である身体的暴力や傷害についてはパートナー間の一致が示される。一方で、精神的攻撃については、女性が加害者の場合にはパートナー間の一致が示されるものの、男性が加害者の場合には示されない。なお、性的強制に関しては、実際にこの暴力形態をとる割合が少ないため、解釈を避けた。また、女性が加害者となる精神的攻撃を除き、重篤度の高い暴力形態は割合が少ないため相関係数による一致が示されなかった可能性が考えられる。

これらの結果から、物理的な暴力を伴うパートナー暴力に関してはそれが暴力として認識がなされる一方で、物理的な暴力を伴わない形態はそもそもパートナー暴力としての認識がなされていない可能性が考えられる。また、一致が見られた形態であっても、係数の値は十分に高いとはいえない。そのため、今後のパートナー暴力に対する予防や教育的介入の一つとして、お互いの行為がパートナー暴力に該当する可能性について認識を高めることが必要であると考えられる。

Table 11. CTS2-SF でのパートナー暴力加害・被害の一致率 (κ 係数)

加害の項 目 No.	女性加害 (度数)	割合 (%)	男性被害 (度数)	割合 (%)	κ
身体的暴力	9	17	17	16.5	.40 **
	11	6	8	7.8	.22
傷害	6	7	13	12.6	.43 *
	16	1	2	1.9	N/A
精神的攻撃	3	48	51	49.5	.11
	13	6	10	9.7	.44 *
性的強制	19	0	1	1.0	N/A
	17	1	3	2.9	N/A
被害の項 目 No.	女性被害 (度数)	割合 (%)	男性加害 (度数)	割合 (%)	κ
身体的暴力	10	14	17	16.5	.56 **
	12	6	5	4.9	.12
傷害	5	12	9	8.7	.28

	15	3	2.9	5	4.9	.25
精神的攻撃	4	39	37.9	48	46.6	.16
	14	6	5.8	8	7.8	.22
性的強制	20	3	2.9	1	1.0	.18
	18	0	0.0	6	5.8	N/A

* $p < .05$, ** $p < .01$

注) 「N/A」は理論上想定されない値が算出された。

行為者-パートナー相互依存モデル (APIM)

本調査では、カップル関係にある2者からそれぞれデータを測定したため、個人特性がパートナー暴力に与える影響（行為者効果）と共に、パートナーの個人特性がパートナー暴力に与える影響（パートナー効果）を、行為者-パートナー相互依存モデル (actor-partner interdependence model: APIM) によって検証することができる。はじめに、個人差に通底する特徴の各領域が、パートナー暴力加害の総合得点に及ぼす影響を検証した（喜入, 2018b）³。分析の結果を Table 12（左2列）に示した。行為者効果では、調査1と同様に、両親との関係がパートナー暴力と負の関連を示した。しかし一方で、女性の行為者効果ではこの特徴以外の効果は示されず、男性の行為者効果では宗教性からパートナー暴力の正の関連が示された。また、パートナー効果では、女性の明察性が男性のパートナー暴力と負の関連、すなわち、女性パートナーの明察性が低いほど男性がパートナー暴力を行う可能性が高いことが示された。この点について、男性は女性の性的な浮気に敏感であり、また、女性パートナーの明察性が低いことが、男性にとって性的な浮気を予期させる可能性が考えられ、そのためこのようなパートナー効果が示された可能性が考えられる。

Table 12. 個人差に通底する特徴とパートナー暴力との関連の APIM の分析結果（標準偏回帰係数）

			女性優位 (51 ペア)		対等 (30 ペア)		男性優位 (22 ペア)	
	女性の暴力	男性の暴力	女性の暴力	男性の暴力	女性の暴力	男性の暴力	女性の暴力	男性の暴力
女性 明察性	-.07	-.22*	-.27*	-.16	.00	-.01	-.05	-.64*
両親との関係	-.25*	.02	-.14	.07	-.35	-.50*	-.91**	.24
親族との関係	.09	-.03	.00	-.01	.18	.24	.49*	-.08
友人との関係	-.18	.04	-.28	.09	.19	.17	-.26	.00
一般的利他性	.14	.14	.06	-.09	.58**	.47	.12	.03
宗教性	.13	-.02	.29*	.21	-.33	-.19	-.09	-.08

³ 日本心理学会第82回大会で発表された。

	パートナーアタ チメント	-0.06	.00	-.21	.00	.42**	.13	-.28	-.13
男性	明察性	.06	.18	.08	.40*	-.05	-.09	-.25	-.02
	両親との関係	-.02	-.35**	.02	-.52*	-.55*	-.22	-.29	-.53**
	親族との関係	.00	.16	-.12	.32	.37	.15	.34	.28
	友人との関係	.11	.14	.10	-.05	-.06	.07	.46**	.64**
	一般的利他性	-.13	-.07	-.19	-.14	.14	.34	-.06	.08
	宗教性	.18	.29**	.30*	.27*	-.07	.13	.22	.23
	パートナーアタ チメント	.13	.17	.20	.14	.35*	.07	.01	.42*

* $p < .05$, ** $p < .01$

次に、目的変数をパートナー暴力加害の各形態とした APIM の検証を行った。分析の結果を Table 13 に示した。女性の行為者効果では、両親との関係、友人との関係、パートナーアタッチメントが身体的暴力と負の関連を、友人との関係が間接的暴力および言語的暴力との負の関連を示した。また、両親との関係は性的暴力およびストーキングとも負の関連を示し、親族との関係も性的暴力との負の関連を示した。一方で、一般利他性は間接的暴力と正の関連を、パートナーアタッチメントは性的暴力との正の関連を示した。

男性の行為者効果では、両親との関係が身体的暴力、間接的暴力、言語的暴力、性的暴力、ストーキングと負の関連を示した。一方で、宗教性は身体的暴力、間接的暴力、言語的暴力、経済的暴力と正の関連を示し、パートナーアタッチメントは身体的暴力と、明察性は支配・監視および性的暴力と正の関連を示した。

パートナー効果では、男性自身の一般利他性と女性の間接的暴力に負の関連が示された。さらに、男性パートナーの宗教性が女性自身の身体的暴力、間接的暴力、ストーキングと正の関連を、男性パートナーの明察性が女性の身体的暴力と正の関連を示した。

一方、女性パートナーの明察性が男性自身の言語的暴力、ストーキングと負の関連を示した。

Table 13. 個人差に通底する特徴とパートナー暴力加害の各形態との関連の APIM の分析結果 (標準偏回帰係数)

		行為者効果						
		身体的 暴力	間接的 暴力	支配・ 監視	言語的 暴力	性的 暴力	経済的 暴力	ストーキ ング
女性	明察性	-.05	-.10	.03	-.03	.09	-.20	-.10
	両親との関係	-.25*	-.21	-.16	-.07	-.46**	-.16	-.25*
	親族との関係	.13	.08	.10	.04	-.13*	.01	.09

	友人との関係	-.27 *	-.24 *	-.06	-.24 *	.23	-.07	-.05
	一般的利他性	.13	.28 **	.05	.18	-.01	.10	-.08
	宗教性	.02	.05	.16	.11	-.16	.17	.12
	パートナーアタッチメント	-.25 **	-.10	.05	-.08	.20 *	.06	-.08
男性	明察性	.13	.08	.23 *	.09	.22 *	.05	.03
	両親との関係	-.37 **	-.39 **	-.01	-.29 *	-.25 *	-.16	-.26 *
	親族との関係	.12	.18	-.06	.17	.25 *	.06	.02
	友人との関係	.08	.18	.08	.13	-.12	.15	.18
	一般的利他性	-.04	-.16	.08	-.14	-.11	.07	-.01
	宗教性	.30 **	.23 *	.13	.32 **	.11	.22 *	.09
	パートナーアタッチメント	.22 *	.18	.09	.10	.07	.09	.08

パートナー効果

		身体的 暴力	間接的 暴力	支配・ 監視	言語的 暴力	性的 暴力	経済的 暴力	ストーキング
男性パート ナー	明察性	.22 *	.13	-.09	.03	.05	.01	.05
	両親との関係	.03	-.09	.03	-.04	.13	-.10	-.04
	親族との関係	-.06	.09	.00	-.06	.08	.06	-.07
	友人との関係	.04	.00	.19	.09	-.17	.15	.13
	一般的利他性	-.13	-.23 *	-.03	-.13	.13	-.11	-.10
	宗教性	.22 *	.23 *	.11	-.06	.12	.14	.22 *
	パートナーアタッチメント	.05	.07	.22 *	.03	.13	.08	.05
女性パート ナー	明察性	-.04	-.17	-.17	-.25 *	-.06	-.08	-.21 *
	両親との関係	.03	.08	-.05	.14	-.05	-.07	-.04
	親族との関係	-.05	-.10	-.04	-.02	.03	.03	.02
	友人との関係	.12	-.05	.20	-.05	-.03	-.03	.09
	一般的利他性	-.05	.08	.18	.14	.10	.09	.08
	宗教性	.03	.04	-.04	-.09	-.08	.03	.09
	パートナーアタッチメント	-.04	-.08	.09	.06	-.01	-.03	-.06

* $p < .05$, ** $p < .01$

パワーバランスの効果

カップル関係変数の効果を検証するために、パートナー間のパワーバランスに着目し、各ペアを女性優位（51 ペア）、対等（30 ペア）、男性優位（22 ペア）のいずれかに分類した上で、パートナー暴力の総合得点を目的変数、個人差に通底する特徴の7領域を説明変数、パワーバランスをグループ分け変数として多母集団同時分析による APIM の検証を行った。分析の結果を Table 12（3 列目から 8 列目）に示した。女性の特性とペアのパートナー暴力との関連は次のとおりである。まず、女性優位ペアでは、女性のパートナー暴力と女性の明察性が負の関連を、宗教性が正の関連を示した（行為者効果）。また、男性の宗教性が女性のパートナー暴力との正の関連を示した（パートナー効果）。対等ペアでは、女性の一般利他性およびパートナーアタッチメントが女性のパートナー暴力に正の関連を示し（行為者効果）、女性の両親との関係が男性のパートナー暴力と負の関連を示した（パートナー効果）。男性優位ペアでは、女性のパートナー暴力と女性の両親との関係が負の関連を、親族との関係が正の関連を示した（行為者効果）。また、女性の明察性が男性のパートナー暴力と負の関連を示した（パートナー効果）。

男性の特性とペアのパートナー暴力との関連は次のとおりである。女性優位ペアでは、男性のパートナー暴力と男性の明察性、宗教性が正の関連を、両親との関係が負の関連を示した（行為者効果）。また、男性の宗教性が女性のパートナー暴力と正の関連を示した（パートナー効果）。対等ペアでは、男性の両親との関係が女性のパートナー暴力と負の関連を、パートナーアタッチメントが正の関連を示した（パートナー効果）。男性優位ペアでは、男性の両親との関係が男性のパートナー暴力と負の関連を、友人との関係およびパートナーアタッチメントが正の関連を示した（行為者効果）。また、男性の友人との関係が女性のパートナー暴力と正の関連を示した（パートナー効果）。なお、個人特性とパートナー暴力との関連に対する交際宣言の調整効果は示されなかった。

調査 2 の考察

本調査では、カップル関係にある 2 者を対象に実施した。パートナー暴力の認識について、一致率は高いとは言えなかった。つまり、一般的なカップル間で、意識されずにパートナー暴力の加害者になっていたり、または被害者になっている可能性が考えられる。社会的な制度によってパートナー暴力の認識が高まっていると考えられるものの、現段階では依然不十分である可能性がある。

また、個人差に通底する特徴のうち、女性の明察性が低い場合に男性のパートナー暴力を促進する可能性が示された。この結果から、パートナー暴力の発生はその個人だけの問題ではなく、パートナー間の問題としても起こり得ることが考えられる。

さらに、パワーバランスによっても関連が異なった。特に、女性の明察性の低さが男性のパートナー暴力を促進するという関連は、男性優位ペアでのみ示された。この点について、男性優位である場合には、男性が女性をより管理しようという意識が働くことが影響するかもしれない。一方で、対等ペアでは両親との関係の低さが男女いずれもパートナーによるパートナー暴力を促進した。こ

の点は、2 者がお互いに両親との関係の低さをパートナーにも般化させてしまった結果である可能性が考えられる。

今後の課題

本調査ではパートナー暴力を測定する尺度として IPV 尺度の妥当性を検証し、カップル間要因であるパワーバランスの効果を検証した。研究知見を踏まえ、今後の研究では、IPV 尺度が重篤度の高いパートナー暴力と連続性を持つかどうか、IPV 尺度と個人特性との関連は弱く必ずしもパートナー暴力に発展するとは言えないことから、どのような条件によってこれらは実際の暴力と結びつくのか、カップル関係要因としてのパワーバランスを踏まえてどのようにパートナー関係を形成していくのかについて、研究を進める必要があるだろう。

文献

- 赤澤 淳子 (2015). 親密な二者関係のダークサイドとしてのデート DV 発達心理学研究, 26, 288-299.
- Bair-Merritt, M. H., Lewis-O'Connor, A., Goel, S., Amato, P., Ismailji, T., Jelley, M., ... & Cronholm, P. (2014). Primary care-based interventions for intimate partner violence: A systematic review. *American Journal of Preventive Medicine*, 46, 188-194. doi:10.1016/j.amepre.2013.10.001
- Bastiaansen, L., Rossi, G., Schotte, C., & De Fruyt, F. (2011). The structure of personality disorders: Comparing the DSM-IV-TR Axis II classification with the five-factor model framework using structural equation modeling. *Journal of Personality Disorders*, 25, 378-396. doi:10.1521/pedi.2011.25.3.378
- Brennan, K. A., & Shaver, P. R. (1998). Attachment styles and personality disorders: Their connections to each other and to parental divorce, parental death, and perceptions of parental caregiving. *Journal of personality*, 66, 835-878.
- Copp, J. E., Giordano, P. C., Longmore, M. A., & Manning, W. D. (2015). Stay/leave decision-making in non-violent and violent dating relationships. *Violence and victims*, 30, 581-599. doi:10.1891/0886-6708.VV-D-13-00176.
- Dillon, G., Hussain, R., Loxton, D., & Rahman, S. (2013). Mental and physical health and intimate partner violence against women: A review of the literature. *International Journal of Family Medicine*, 2013, 313909. doi:10.1155/2013/313909
- Douglas, K. S., & Dutton, D. G. (2001). Assessing the link between stalking and domestic violence. *Aggression and Violent Behavior*, 6, 519-546. doi:10.1016/S1359-1789(00)00018-5
- Figueredo, A. J., Garcia, R. A., Menke, J. M., Jacobs, W. J., Gladden, P. R., Bianchi, J., ... & Jiang, Y. (2018a). The K-SF-42: A new short form of the Arizona Life History Battery. *Evolutionary Psychology*. doi:10.1177/1474704916676276
- Figueredo, A. J., Jacobs, W. J., Gladden, P. R., Bianchi, J. M., Patch, E. A., Kavanagh, P. S., ... & Jiang, F. (2018b). Intimate partner violence, interpersonal aggression, and life history strategy.

- 日道 俊之・小山内 秀和・後藤 崇志・藤田 弥世・河村 悠太・野村 理朗 (2017). 日本語版対人反応性指標の作成 心理学研究, 88, 61-71. doi:10.4992/jjpsy.88.15218
- Jonason, P. K., Baughman, H. M., Carter, G. L., & Parker, P. (2015). Dorian Gray without his portrait: Psychological, social, and physical health costs associated with the Dark Triad. *Personality and Individual Differences*, 78, 5-13. doi:10.1016/j.paid.2015.01.008
- Jonason, P. K., & Tost, J. (2010). I just cannot control myself: The Dark Triad and self-control. *Personality and Individual Differences*, 49, 611-615. doi:10.1016/j.paid.2010.05.031
- Jones, D. N., & Figueredo, A. J. (2013). The core of darkness: Uncovering the heart of the Dark Triad. *European Journal of Personality*, 27, 521-531. doi:10.1002/per.1893
- 警察庁 (2018). 平成 29 年におけるストーカー事案及び配偶者からの暴力事案等への対応状況について. [https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/stalker/H29STDV_taioujoukyou_shousai.pdf]
- 喜入 暁 (印刷中). 婚姻関係とパートナー暴力の程度との関連 日本犯罪心理学会第 56 回大会.
- 喜入 暁 (2018a). パートナー暴力のメカニズム——Dark Triad と生活史戦略による個人差に対するアプローチ—— 学位論文 法政大学大学院人文科学研究科博士論文 (未公刊)
- 喜入 暁 (2018b). 生活史戦略とパートナー暴力との関連——パートナー 関係にある 2 者のペアデータによる検証—— 日本心理学会第 82 回大会.
- 喜入 暁 (2018c). 親密なパートナーへの暴力 (IPV) 尺度の作成と妥当性の検証 (3) ——ビッグファイブ, 共感性, アタッチメント, セルフコントロールとの関連—— 日本社会心理学会第 59 回大会発表論文集, 165.
- Kiire, S. (2017). Psychopathy rather than Machiavellianism or narcissism facilitates intimate partner violence via fast life strategy. *Personality and Individual Differences*, 104, 401-406. doi:10.1016/j.paid.2016.08.043
- 喜入 暁 (2016). Dark Triad と 5 因子性格モデルとの関連 法政大学大学院紀要, 76, 49-54.
- 喜入 暁・越智 啓太 (2015). 包括的なデートバイオレンス・ハラスメント尺度の開発 日本社会心理学会第 56 回大会発表論文集, 186.
- 喜入 暁・越智 啓太 (2016a). 親密なパートナーへの暴力 (IPV) 尺度の作成と妥当性の検証 (1) ——デモグラフィックデータとリスク行動 (飲酒・喫煙) に焦点を当てた分析—— 日本社会心理学会第 57 回大会発表論文集, 356.
- 喜入 暁・越智 啓太 (2016b). 親密なパートナーへの暴力 (IPV) 尺度の作成と妥当性の検証 (2) ——パーソナリティ (ASPD, BPD, Dark Triad) に焦点を当てた分析—— 日本パーソナリティ心理学会第 25 回大会発表論文集, 110.
- 中尾 達馬・加藤 和生(2004). 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み 心理学研究, 75, 154-159. doi:10.4992/jjpsy.75.154
- 越智 啓太・甲斐 恵利奈・喜入 暁・長沼 里美 (2016a). 改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析 (3) ——恋愛行動パターンと DV との関連—— 法政大学文学部紀要, 73,

109-126.

- 越智 啓太・喜入 暁・甲斐 恵利奈・長沼 里美 (2015a). 女性蔑視的態度とデートハラスメントの関連 法政大学文学部紀要, 70, 101-110.
- 越智 啓太・喜入 暁・甲斐 恵利奈・佐山 七生・長沼 里美 (2015b). 改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析 (1) ——被害に焦点を当てた分析—— 法政大学文学部紀要, 71, 135-147.
- 越智 啓太・喜入 暁・佐山 七生・甲斐 恵利奈・長沼 里美 (2016b). 改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析 (2) ——加害に焦点を当てた分析—— 法政大学文学部紀要, 72, 161-171.
- Ohnishi, M., Nakao, R., Shibayama, S., Matsuyama, Y., Oishi, K., & Miyahara, H. (2011). Knowledge, experience, and potential risks of dating violence among Japanese university students: A cross-sectional study. *BMC Public Health*, 11, 339-346. doi:10.1186/1471-2458-11-339
- 小塩 真司・阿部 晋吾・カトローニ ピノ (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み パーソナリティ研究, 21, 40-52. doi:10.2132/personality.21.40
- 尾崎 由佳・後藤 崇志・小林 麻衣・沓澤 岳 (2016). セルフコントロール尺度短縮版の邦訳および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 87, 144-154. doi:10.4992/jjpsy.87.14222
- Straus, M. A., & Douglas, E. M. (2004). A short form of the revised Conflict Tactics Scales, and typologies for severity and mutuality. *Violence and Victims*, 19, 507-520. doi:10.1891/vivi.19.5.507.63686
- Melton, H. C. (2007). Predicting the occurrence of stalking in relationships characterized by domestic violence. *Journal of Interpersonal Violence*, 22, 3-25. doi:10.1177/0886260506294994
- Nicolaidis, C., Curry, M. A., Ulrich, Y., Sharps, P., McFarlane, J., Campbell, D., ... & Campbell, J. (2003). Could we have known? A qualitative analysis of data from women who survived an attempted homicide by an intimate partner. *Journal of General Internal Medicine*, 18, 788-794. doi:10.1046/j.1525-1497.2003.21202.x
- Yuki, M., Schug, J., Horikawa, H., Takemura, K., Sato, K., Yokota, K., & Kamaya, K. (2007). Development of a scale to measure perceptions of relational mobility in society (Hokkaido University).